

# アメリカ文学と書簡体

——クレヴクール『アメリカ農夫の手紙』

若林麻希子

## はじめに

クレヴクール（本姓ミシエル・ギヨーム・ジャン・ド・クレヴクール）は、『アメリカ農夫の手紙』を、新大陸アメリカで過ごした二五年間の経験をもとに編纂し、一七八二年にロンドンで出版した。彼がアメリカで過ごした一七五五年から一七八〇年の二五年間は、フレンチ・アンド・インディアン戦争（一七五四—一七六三）とアメリカ独立戦争（一七七六—一七八三）を網羅するアメリカ独立革命期に相当している。彼は、イギリス植民地としてのアメリカの始まりと終わり、それは言い換えれば、アメリカが植民地から独立国家へと発展を遂げるまでの道程を、アメリカ国内から見守り続けていたのである。そのような貴重な経験から得たアメリカについての生の情報が詰まった『手紙』は、独立

自営農民の自由、平等、勤勉の精神に基礎をおく、アメリカの独自性を力強く大胆にアピールした先駆的なアメリカ文化論として、今日に至ってもなおアメリカ研究のバイブルであり続けている。

『手紙』は、そのタイトルが暗示しているように、手紙の束、つまり、書簡集という体裁をもっている。アメリカ農夫ジェイムズが、イギリス紳士F・B氏たつての望みに応えて、アメリカについての最新情報を伝えるという前提によって、このアメリカ通信は成り立っている。アメリカ文学としても、アメリカ論としても、古典的な地位を獲得しているにもかかわらず、『手紙』が書簡体形式で書かれた文学であることが、批評的問題として扱われるようになったのは、実のところ、比較的最近になってからのことである。しかし英語圏書簡体文学研究の分野では、すでに、一八世紀アメリカを代表する書簡体文学として認知され、『手紙』の書簡性について積極的かつ様々な問題提起が行われている。『手紙』は、書簡体文学として読まれることによって、どのような新しい表情を見せてくれるのだろうか。その表情の一端を実際のテキストを辿りながら探ってみることに、それがここでの狙いである。

## 1 『アメリカ農夫の手紙』について

まず、『アメリカ農夫の手紙』が、どのような内容の書簡体文学であるか、その概要を確認する

ことから始めよう。次に示すように、この書簡体文学は十二通の手紙によって構成されている。

手紙一 序

手紙二 アメリカ農夫の境遇、感情、喜びについて

手紙三 アメリカ人は何者か？

手紙四 ナンタケット島の描写、および住民の風習、習慣、政策、交易

手紙五 ナンタケット住民の一般的な教育と職業

手紙六 マーサズ・ヴィンヤード島および捕鯨についての記述

手紙七 ナンタケットにおける風俗および習慣

手紙八 ナンタケットの特殊な習慣

手紙九 チャールズタウンの描写、奴隷制度についての考察、肉体的な悪について、ある憂鬱な光景

手紙十 ヘビおよびハチドリについて

手紙十一 ロシア紳士 Mr. ROANER 氏が私の要請で有名なペンシルヴェニアの植物学者ジョン・

バートラム氏を訪ねた折の様子を語る

手紙十二 辺境開拓者の悲哀

「手紙一」は、アメリカ農夫ジェイムズが、博識なイギリス紳士F・B氏と文通することを決意した経緯を説明する手紙である。知識や教養の乏しいアメリカ農夫が、F・B氏のような洗練された文化人の知的好奇心を満足させられるだろうかという不安が、徐々に「自然の許すままに自由な活力をもって溢れんばかりに幹を拡げ、枝を伸び放題に伸ばしている、そんなアメリカの野生のサ克蘭ポのなる木」(四九)を髣髴とさせるような、アメリカ農夫らしい手紙を書きたいという意欲に取って代わられる様子を、ジェイムズと妻と牧師のユーモラスな会話を交えながら、生き生きと描き出している。

「手紙二」は、農場と家族を中心に展開するジェイムズ自身の日常生活から、典型的なアメリカ農夫の暮らしぶりを紹介する手紙である。「行動の自由、思想の自由を持ち、私たちにほとんどなにも要求しない政治形態に統治されているアメリカ農夫の地位よりも堅実な幸福の仕組みを授けてくれるものが、どこにあるのでしょうか」(五六)。そう問いかけたくなるジェイムズの実感を裏書きするような土地と人間の豊穡な関係が浮き彫りにされている。ヨーロッパ農奴とは全く対照的なアメリカ農夫特有の自由土地保有者フリースホルダーという地位に対するジェイムズのおマージュだといえる。

「手紙三」は、『アメリカ農夫の手紙』の中で最も有名な手紙である。「アメリカ人は何者か?」という本質的な問いに解答を与えることによって、クレヴクルの書簡体文学を先駆的なアメリカ論へと仕立てあげた立役者である。少々長い引用になつてしまふが、その有名な一節を引いてみることにしよう。アメリカ論としての『手紙』の魅力に無知であつては、書簡体文学としての『手紙』

の理解に到達することも難しい作業になってしまふからだ。

ではアメリカ人、この新しい人間は、何者でしょうか。ヨーロッパ人でもなければ、ヨーロッパ人の子孫でもありません。したがって、他のどの国にも見られない不思議な混血です。私はこんな家族を知っていますが、祖父はイングランド人で、その妻はオランダ人、息子はフランス人の女性と結婚し、今いる四人の息子たちは今では四人とも国籍の違う妻を娶っています。偏見も生活様式も、昔のものはすべて放棄し、新しいものは、自分の受け容れてきた新しい生活様式、自分の従う新しい政府、自分の持っている新しい地位などから受け取ってゆく、そういう人がアメリカ人なのです。彼は、わが偉大なる「育ての母」<sup>アルマ・マテル</sup>の広い膝に抱かれることによってアメリカ人となるのです。ここでは、あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日にかこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう。アメリカ人は、遠い昔に東方で始まったじつに多くの芸術、学問、活力、勤勉を持ち運んでくる西方の巡礼者です。彼らはやがて偉大な円環<sup>サークル</sup>を完成するでしょう。アメリカ人はかつて、ヨーロッパ全土に散在していました。彼らはここで合流して、もつとも素晴らしい人間集団の一つとなっているのですが、このような集団はかつてあったためしはなく、これからも、彼らの住む異質の風土の力によって独自のものになってゆくでしょう。したがって、アメリカ人が、自分もしくは祖先たちの生まれた国よりもよりいっそうこの国を愛するのは当然のことなのです。ここでは、

勤勉の報酬は、仕事の進み具合と同じ歩調で増えてゆきます。彼の労働は自然の根本原理である利己心に基づいています。これより強い誘因が必要でしょうか。かつては一きれのパンをねだって得られなかった妻や子供たちも、今や、肥えて陽気になり、豊穡な収穫によって自分たちみんなの食糧と衣類をもたらししてくれるのはほとんどの畑を、父を助けて喜んで耕しておりますが、その収穫は一部たりとも、専制君主や裕福な僧院長や強大な領主に取り上げられることはありません。ここでは宗教が人びとに強要するものはほとんどありません。つまり、牧師に対する僅かばかりの寄金と、神への感謝の気持ちだけは求められます。誰がこれらを拒否できませんでしょうか。アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です。したがって、アメリカ人は新しい思想を抱き、新しい意見を持たなければなりません。不本意な怠惰、奴隸的屈従、貧困、無益な労働から、豊かな生計を報酬として与えてくれるまったく異なった性質の労働へと移ったのです。これがアメリカ人です。(七五―七六)

ヨーロッパ各地からやってきた移民は、新大陸特有の新しい労働原理の洗礼を受けてアメリカ人となる。特権階級の利益のために働かされるヨーロッパとは対照的に、アメリカでは誰もが「利己心」を満たすために働く。その新しい経験が「新しい思想」や「新しい意見」へと受肉した時、アメリカ人としてのアイデンティティーが開花するのだ。「手紙三」は、基本的には、先行する手紙の農本主義社会の理想図を反復補強する手紙である。しかし、その一方で、未来の世界をリードする「新

たな思想」と「新たな意見」の発信源というアメリカが担うべき新たな役割の展望がなされるところは、現代世界の構造を思うと、とりわけ興味深いといえるだろう。

先行する手紙が「アメリカ概論」を展開していたとすれば、「手紙四」から「手紙九」は、概論を補強するための「アメリカ各論」だと言えるだろう。「手紙四」から「手紙八」は共に、マサチューセツ州沖合いに位置し、捕鯨業で栄えていたナンタケット島とマーサズ・ヴィンヤード島を例にして、漁業によるアメリカ人の暮らしぶりを紹介している。島であり砂州であるという定住にははなはだ不適な環境条件であるにもかかわらず、捕鯨業によって豊かな社会を築き上げることができた事実には、アメリカ人の「生来の勤勉と忍耐」(一九)のもうひとつの成果を見出すことになるのが、これらの手紙においてである。

「手紙九」では、現在のチャールストンであるチャールズタウンを舞台に、奴隷制度の問題に観察のメスが入れられることになる。「チャールズタウンにおいてはすべてが喜びで、賑わいで、幸福であるというのに、その一方で、悲惨な光景がこの地方一帯に拡がっているなど、ご想像になれますでしょうか。人びとの耳は習慣の力で聞こえなくなり、心は無感覚になっています。すべての富が奴隷たちの苦痛に満ちた労働によって生み出されているというのに、彼らは哀れな奴隷たちの苦痛を見ることも、聞くことも、感じることもしないのです。ここでは奴隷制度の恐怖、絶えざる苦役の苦痛は、目で見られていません」(二八〇)。奴隷制度という忌々しい現実を捉える「手紙九」は、『手紙』のアメリカ論の第一の転換点である。先行する手紙が繰り返し描き続けてきたアメリカ繁

栄のビジョンに、暗雲が漂い始める瞬間がここにあるのだ。

これまでの手紙がアメリカ人の営みについて語ってきたのであれば、「手紙十」と「手紙十一」は、アメリカにおける自然の営みについての考察になっている。「手紙十」は、ヘビとハチドリについてジェイムズ本人が書いた手紙だが、「手紙十一」は、その長いタイトルが示す通り、彼がロシア紳士に依頼して著名な植物学者バートラム氏を訪問してもらい、その際の報告としてロシア紳士が書きよこした手紙を流用するという大変奇妙な体裁をとっている。話題がアメリカの自然へと転換した途端、手紙の体裁が変化する。「手紙九」が奴隸制を扱う上で『手紙』のアメリカ論の転換点を構成するのであれば、「手紙十」と「手紙十一」は書簡体文学としての『手紙』の転換点である。この書簡体の変化は何を意味しているのだろうか。その辺の詳しい事情は、後述することにしよう。

「手紙十二」は、独立戦争の戦火を逃れるために、インディアン部落に移住することを決意したジェイムズが、F・B氏に別れを告げるために書いた手紙である。独立戦争を、アメリカの繁栄を支えた自由土地保有者が「辺境開拓者」へと転落する災難として描く点において、この手紙は、奴隸制度の現実を暴露した「手紙九」と共に、アメリカの繁栄と明るい未来展望を無批判に信じていることができない状況を暴露している。また、インディアン部落に移住しようとするジェイムズが、「数多の消し難い性格によって私たちと明確に区別してきた造物主の意図から見て、疑いもなく不快な彼らと血のつながりを持つこと」(二四〇)の可能性に不安を隠せないでいるところなどは、人種の混交に対する当時の白人の先入観を探る格好の材料だといえるだろう。



以上が『アメリカ農夫の手紙』の概要である。全体的な趣旨としては、「私たちは今日の世界に存在するもつとも完璧な社会集団」(七二)であることを自負するアメリカ人によるアメリカ礼賛であることに間違いはない。しかし『手紙』に発見されるのは、恐らく、独立革命期という特定の時代に輪郭を与えられたアメリカの限定的な姿にとどまるものではないだろう。「個人主義」、「領土拡張主義」、「民主主義」、「多民族多文化主義」といった現代アメリカ文化を考える上でも重要なキーワードに接続するアメリカの原点を発掘すること、それこそがアメリカ農夫ジェイムズからのアメリカ通信を読む現代的な醍醐味だといえるだろう。

## 2 一八世紀アメリカと手紙文化

書簡体文学としての『アメリカ農夫の手紙』を、端的に要約するとすれば、それは恐らく、新大陸への手紙文化移植の物語ということになるだろう。一八世紀ヨーロッパは「手紙の一〇〇年」と言われる。それほど手紙がひとつの顕著な文化流行を生み出していたのだ。そもそも手紙文化は、ダンスや会話と同様に、貴族階級の礼儀作法の一環としてたしなまれてきたが、一八世紀の近代化の流れのなかで中産階級の間にも普及するようになった。手紙の大衆化には、一八世紀に誕生した新しい文学である小説が多なる貢献をしたと考えられてもいる。世界初の小説として認知されて

いるサミュエル・リチャードソンの『パミラ』（二七四〇）は、書簡体小説として書かれたが、その作者の意図にはみずからの小説を「手紙例文集」の付加価値をつけて売り出すことであつたとも推測されている。いずれにせよ、リチャードソンがパミラという女性主人公に投影した、現代ならば携帯マニアに匹敵すると思われる「手紙マニアの女中」というイメージは、一八世紀イギリスにおける手紙文化の大衆レベルでの浸透の度合いを仄めかしていることだけは間違いない。

一方、クレヴクルの『手紙』は、一八世紀のアメリカ植民地が同時代ヨーロッパにおけるような手紙文化の大衆化現象の圏外にしていることを伝えている。

あなたが彼方のロンドンにいる偉いお金持ちの方へ手紙を書いているなんてことがほかへ漏れたらさいご、世間の噂は止まるところを知らないでしょう。あなたが作家になるんだなんてことを、したり顔に言う人もいますでしょう。あなたの家族の暮らしぶりが一段とよくなるだろうなどと、先見の明のありそうなことを言う人もいますでしょう。ああ言う者もいれば、こう言う者もいます。誰が世間の噂の種になぞなりたがるものでしょう。始める前に、そのところをようく考えて下さいね、ジェイムズ。いいですか、あなたの時間と評判の大部分がかかっていることを考えてね。友人のエドモンドさんのお話は新聞でよく見ますが、あの人のように上手に書いたところで、結果はまったく同じことになります。あなたも同じように、わが身の身分を忘れた遊興だ、ひとりよがりの気まぐれだと、非難されるのです。あの大佐さんも、あなたがそんなに沢山書ける内容

がどんなものか知りたがって、しよっちゅうここにやって来ることになるでしょう。なかにはあなたのことを、とんでもないことだけど、州議会の議員か治安判事になりたがって役人どもにいろんなことを告げ口しているのだ、などと想像する者もいるでしょう。今のようには尊敬されて世間の人たちと仲良く暮らしてゆけなくなつて、隣人たちもあらぬ憶測をしたりするでしょう。(中略) あなたの書きものの好きはどこから来たのかしら。もしお父様があちらこちらへ手紙を送つて暮らしていたら、借金なしでこの立派な開拓地をあなたに遺しはしなかつたでしょう。私はなにもかも善意で言つてるのよ。海の彼方のお偉い方たちが私たちの町の人たちに手紙を下さるのは、あの方たちにはほかにすることがないからなのよ。あのイングランドの人たちって、不思議な人たちね。あの人たちは働きもしないで、紙幣とかいうもので生きてゆけるものだから、世間の人もみんな同じようにできると考へてるわけよ。この立派な国はそういう紙幣じゃ耕したり開墾したりするわけにはいかなかつたでしょう。(五一—五二)

ここに示されているのは、文通とは一八世紀アメリカの生活様式に馴染まない文化であるという認識だ。「紙幣とかいうもので生きてゆける」イギリス人とは違い、土地の開拓や農作業に従事しなくては生計が成り立たないアメリカ人には、手紙などを書く時間的余裕などない。だから文通などに手を染めるようなアメリカ人は、身の程知らずの道楽者か、隣人を裏切ることをも厭わない野心家か、いずれにしても農本主義社会の逸脱者としてのけ者扱いされるのを避けることはできない。

「文通する」という行為は決して無垢ではありえなかったのだ。

文通に対する不信感と偏見に満ちた空気が漂うアメリカ、それは別の言い方をすれば、手紙文化が根付く素地のない不毛なアメリカを背景に背負いながら、ジェイムズはF・B氏との国際文通を開始するのだ。洗練されたイギリス紳士の手ほどきを受けながら、アメリカ農夫ジェイムズは、新大陸アメリカに手紙文化の種を蒔くことができるのだろうか。果たしてその種は芽を吹き、花を咲かせ、実を結ぶことになるのだろうか。ジェイムズの文通相手が、女中パミラをも虜にする勢いで手紙文化が大衆化したイギリス出身の紳士であることは決して偶然の設定ではない。『アメリカ農夫の手紙』というタイトルは、当時のヨーロッパ人たちに新大陸アメリカの最新情報を期待させたというが、その期待感のうちには「アメリカ農夫に一体どんな手紙が書けるのか？」という好奇心がきつと同居していたに違いないのだ。

### 3 「文通する (Letter it)」とは何か？

文通を実行に移す際にジェイムズは、F・B氏が書くべき話題を指定し、自分がそれに応えるという質疑応答形式のやりとりをイメージしていた。「私の経験と知識の届く範囲内にあるもの以外は私に要求しない」(四三)というF・B氏の言葉も、ジェイムズには彼自身の知識不足の負目を補

う何よりの励ましに響いたし、「手紙を書くのは紙に話をするようなもの」(四三)というアイデアも文才に自信がない彼には心地よく魅力的だった。相手がF・B氏である限り文通に不具合が生じる心配はない、そう素直に信じていることができた。しかし、このようなジェイムズの期待がはかないものでしかないことが判明してしまうのだ。

ジェイムズのアメリカ通信は、進行するにつれて、主観性が失われ、客観的な報告文のうちに書き手の存在感が埋没してしまうことが指摘されている。先ほど概観した『手紙』を構成する手紙のタイトルに、ここでもう一度立ち返ってみれば、手紙の主題が確かに主観的なものから客観的なものへと推移している様子がよりはつきり見えてくるだろう。十二通の手紙のうち、ジェイムズのアメリカ農夫としての主体的な体験が、積極的な意味をもつ手紙は、「手紙一」から「手紙三」の最初のわずか三通である。それ以降の手紙は、ジェイムズの実体験を綴ったものではなく、彼が旅をする中で見たり聞いたりして集めた情報から成り立っているものばかりだ。

ジェイムズは、「手紙二」を締めくくるにあたり、F・B氏にこう明言していた。「よくご存知のように、私は哲学者でも、政治家でも、神学者でも、博物学者でもなく、一介の農夫です。(中略)もしあなたが、学識ある人たちの書きぶり、愛国者の意見、政治家の議論、博物学者の詳しい観察、高級な趣味を持つ人の見栄えのする服装をお望みでしたら、きつと私たちの都会に沢山いる文人たちのところへ行かれたことでしょう。ところがあなたは、その反対に、どうしたことか、土を耕す者、一介の住民と文通することを希望しておられるのですから、よかれ悪しかれ私の手紙をお受けとり

になるほかはないのです」(五三一五四)。このようなアメリカ農夫として文通を行いたいという当初の願いは裏腹に、F・B氏の知的好奇心を満たすためには、アメリカ各地を旅する旅行者となり、アメリカの地方の風俗習慣を調査する民俗学者となり、アメリカの動物相、植物相を観察してまわる博物学者となり、ジェイムズは、身分不相応な偽りのマスクをまとわなければならなかったのだ。

ジェイムズが、F・B氏との文通の中で主体性が搾取されていることについて、決して無関心ではなかったことが「手紙十」の冒頭で打ち明けられている。「どうしてもこのような仕事をご依頼なさるのでしょうか。私たちがみずから進んでする仕事はいつも、ほかから押しつけられる仕事に比べて軽い気がするものです。あなたは私に、どうしてもわが国のへびについてなにか書けとおっしゃいます。それに、へびについて私の知っていることをお話するにしましても、二つの珍しい事件、つまり、その一つは私が目にしたもので、他の一つはある目撃者から聞いたものですが、この二つがなかったら、お話しするようなことはほとんどないでしょう」(一九三)。彼の「経験と知識の届く範囲内」の情報交換であるはずだった文通が、彼の許容範囲を超えてしまった。F・B氏が本当に望んでいたのはアメリカ農夫との素朴な文通ではなく、所詮は「学識ある人たちの書きぶり、愛国者の意見、政治家の議論、博物学者の詳しい観察、高級な趣味を持つ人の見栄えのする服装」だった、そんな疑念がジェイムズの心をよぎる。アメリカ農夫としての自分自身の地位が無意味であることを悟ったからこそ、彼は「手紙十一」においてみずから筆をとることをせず、植物学者ジョン・パートラムを訪ねたロシア人旅行者「P. R.」の報告文書をそのまま転送したのだ。先ほど『手

紙』を概観する中で、「手紙十」と「手紙十一」は書簡体文学としての『手紙』の転換点となっていると指摘したが、保留にしてみました。「その辺の詳しい事情」とは、まさに、F・B氏との文通においてアメリカ農夫としての声や立場を無視され、単なる情報の転送者へと還元されてしまったことに気づいたジェイムズが、沈黙の抗議を託しているのが、これらの手紙の内実だったのだ。

「文通する」とは何か。こうジェイムズに問いかけてみれば、彼はきつと自己犠牲行為だと返答するだろう。彼の文通の舞台となった一八世紀アメリカは、「手紙文化が根付く素地のない不毛の地」だと前に述べたが、ジェイムズの文通体験に鑑みれば、一八世紀アメリカは精神的にも手紙文化を受容しがたい環境だったともいえるだろう。ヨーロッパ各地からやってきた移民は、「自然の根本原理である利己心」に基づく労働を通して、「束縛を知らない自由な勤勉の精神」（七二）を育みアメリカ人となる。「手紙三」におけるこのような主張を思い起こせば、F・B氏の知的好奇心を満たすために筆を動かす行為に、ジェイムズが愛想を尽かしてしまうのは、それがアメリカ人をアメリカ人たらしめる「束縛を知らない自由な勤勉の精神」への攻撃だからだということが解ってくる。F・B氏の知的好奇心を満たすことを主要目的とする文通において利他的であろうとするジェイムズは、図らずも、アメリカでは許されない農奴的な苦役の疑似体験をさせられていたというわけだ。

#### 4 アメリカ的な書簡とは？

「手紙十一」においてロシア紳士「マーロン」からの手紙を転送する乱暴な行為の後、再びジェームズがペンを握る時、そのペン先からこぼれ出るのは、これまでとは全く違つた質の「声」である。「手紙十二」は「独立戦争の戦火を逃れるために、インディアン部落に移住することを決意したジェームズが、F・B氏に別れを告げるために書いた手紙である」と先に要約したが、それは同時に、「私」という人称が断固たる現前性を成就する、『手紙』における唯一の手紙でもある。

この手紙を特徴づける一人称の語りの例をあげようとすれば、文字通りの切がない作業になつてしまうので、ここでは典型的な一例を参照することに留めておこう。

私は一介の伐採者、土地耕作者であつて、これはアメリカ人の持ちうるもつとも名譽ある呼称です。私には誇るべきなんの功績も発見も発明もありません。私は三七〇エーカーの土地を開拓し、その一部は犁、一部は大鎌が使えるまでにしましたが、私の生涯の何年にもわたる歳月をそれに注ぎ込みました。私は家族の一致した勤勉によつて得られるか産み出されるかする以上のものは、なに一つ所有したこともありませんし、所有したいとも思いません。私は独立した静かな生活を安楽に送り、子供たちには、父親と同じように労働に基づく将来の豊かな生活の糧を準備するに



はどうすればよいかを教える、それ以上のものはなに一つ求めませんでした。これは私の求めた生き方であり、子供達のために設計した生き方であつて、子供たちは好みや性格からしても、そのような生き方に向いているように思われました。だが今や、これらの素晴らしい期待は消えてしまいました。私たちは一九年にわたつて積み重ねられてきた勤勉を諦めなければなりません。どこへ行くという目あてもなく出発し、はなはだしい道なき道を通つて、新しい未知の社会の一員にならなければなりません。ああ、美德よ！これが汝の支持者に与えなければならぬ報酬のすべてなのか。(二二八—二九)

歴史は、独立戦争を「生命、自由、幸福の追求」の人類天賦の権利を守るための戦いと理解する。ジェームズは、その同じ現象を、一九年間にわたる勤勉と禁欲の賜物の一切が水泡に帰する人生破綻だと認識する。このような認識は、ある時は新大陸アメリカを殺戮の舞台と化してまで、重商主義政策を全うしようとする本国イギリスに対する激しい非難の声となり、またある時は大西洋の遙か彼方から、戦況を遠目に観察しながらアメリカ人を「反逆者、裏切者、悪漢」(二三〇)呼ばわりするイギリス人たちへの抗議の声ともなつて、アメリカの立場を正当化するためのレトリックを紡ぎ出す。「この惨事の結末は、近寄つてみればみるほど、ますます身震いがします。でも、こんな脈絡のない話しを書いたりして申し訳ありません。安全で危険を知らない人びとは、悲しい話もくどくなる」とすぐに飽きてしまいます。このように苦悩に満ちた感情を私といっしょに共有することはで

きますか。以前は裕福で有力だった家族に迫っている破滅に対して、一滴でも流して下さる涙を持っていますか。どうぞ、この便りは同情の眼差しと優しい悲しみでお読み下さい。かつてはあなたが友人と呼んで下さり、かつては富裕と安楽と水も漏らさぬ安全に囲まれていた者たち、だが今は毎夜毎夜がこの世の別れとなるかもしれず、法の判決を間近に控えた罪人のように惨めな気持ちでいる者たちの運命を、哀れと思つて下さい」(二二八)。自己満足的に書きたいことを、書きたいだけ書き連ねた挙句に、F・B氏の感受性の器の大きさを試すかのような嘆願に出るやり方は、この手紙の一人称の独善性を暴露しているようでもある。しかし、だからといって、この手紙をコミュニケーションの放棄と受け取つてしまつては誤りになる。というのも、この手紙の声は新たな手紙の様式を指向しているからだ。

「手紙十二」とは、要するに、人間関係を民主的な連帯性として成就することを目指す手紙なのだ。先行する手紙がジェイムズを、支配する者と服従する者の上下関係に位置づけていたのに対し、この手紙は人と人との横のつながりにより大きな関心を抱いている。

「本手紙」のような、遠慮のない私の書きぶりは、あなたがゆめ疑わなかったはずの友情と敬愛の念のたしかな証拠を示すものにほかなりません。同じ社会の一員として、互いに愛情と旧知の絆に結ばれた者として、あなたもきつと私の苦悩には同情せずにはいられないことでしょう。私たちが皆不当に悩まされている肉体的、精神的な災害の重荷に対し、私のために悲しんで下さらな

いわけにはいかないでしよう。私たちの故国に起こったすべてのことがらをあれこれと想いみる時、私はよく自分の重荷のことなどは忘れます。(二四六)

この手紙の一人称の語りを裏打ちしているのは「友情と敬愛の念」である。F・B氏への呼びかけに着目してみても、「同じ社会の一員」、「互いに愛情と旧知の絆に結ばれた者」には、イギリス人であるとかアメリカ人であるとか、敵であるとか味方であるなどのお互いを対立関係に置くような含意はなく、むしろ「同胞」というアイデアを想起させる連帯感がある。しかし注意しなければならぬのは、ジェイムズの同胞意識は、単純に、F・B氏を取り込むだけの意識ではないということだ。ジェイムズがここで「私」を口にする時、その背後には必ず「私たち」の存在がある。つまり、この手紙は、ジェイムズへの同情を経由してF・B氏を「私たちが皆不当に悩まされている肉体的、精神的な災害の重荷」の理解へと導くのであって、そこからイギリス人であるとかアメリカ人であるとか、敵であるとか味方であるといった帰属意識を乗り越え、独立戦争の惨事の現実に心を痛める感情経験によつて結ばれた個人集団の形成を仲介しようとしているのだ。

「手紙十二」の生成には、ジェイムズの独立戦争体験が密接に関与している。「独立戦争」という巨大な秤ではかるとしたら、私、私たちは何者でしょうか、このささやかな無防備な辺境住民である私たちは？ 凝視する世間にとつて、私たちが息をすとかしないとか、私たちが死ぬとか死なないとかいうことは、どういうことでしょうか。人目に触れない孤独な場所で私たちがどんな徳行を、

どんな功績や誠実を示してみたところで、なんの役に立つものでしょうか。私たちは犂に殺される蟻のようなものですが、蟻が死滅したからといって、将来の収穫がそこなわれるものでもありません」(二二二)。対立から分裂への危機に瀕する国家に身を置く体験は、ジエイムズに、このような国家と個人の関係性についてのグロテスクな真理を突きつけた。個人の生活と生命を守る義務を忘れた国家は、国土の荒廃を招くだけでなく、人びとの連帯精神さえも破壊する。「今は私たちのあいだではなにもかもが壊滅してしまったため、以前には私たちのほとんど知らなかった『不幸』という言葉も、もはや同じ意味を伝えてはくれず、むしろ、今は誰もが他人の不幸に同情しきれなくなつて、自分のことしか思いやれない始末です」(二二五)。自己防衛の必要性が共同体の求心力に致命的な打撃を与えるのだ。そして、この共同体喪失の危機、その不穏なビジョンがジエイムズの脳裏にある思想を植えつける。

この地球の表面に生きる動物のうち、人間というものは、もはや社会と関連を絶つて、動転し半ば分解しかけた社会の中で生きているとしたら、何者なのでしょう。人は孤立して生きてゆけるものではありません。たとえ不完全でもなんらかの絆に結ばれた共同体に属していなければなりません。人間は相互に助け合つて、互いの力と自信に貢献するものです。各人の弱さは全体の力によって強化されます。こういう悲惨な時代になる前は、そのような考えなど持ったこともありませんでした。私はただ生活を続け、働き、そして繁栄したままで、私の生活の安全性や私の

繁榮の基礎がどんなものの上に打ち建てられたものであるかなどとは、考えてみたことともありませんでした。与えられるがままに受け取っただけです。(二一五)

人は孤立して生きてゆけない。人は共同体の一員となつて初めて人間らしさを發揮することができ  
るのだ。大西洋を越えた人と人とのつながりを切望する「手紙十二」とは、まさに、人が人間らし  
くあるためには「相互に助け合つて、互いの力と自信に貢献する」場が必要不可欠なのだという、  
独立戦争という悲惨な体験をするまで、考えてもみなかった思想の上に成り立っているのだ。アメリ  
カ農夫からの最後の手紙は、「私」という一人称の暴走では決してない。国家が個人を踏みじり、  
共同体を崩壊の危機に追い込んでゆく、独立戦争期のアメリカという特定の状況が生み出した思想  
の結実という意味において、「手紙十二」は新しいアメリカ的な手紙の誕生を告げているといえる  
だろう。

## おわりに

手紙は小説に馴染むメディアである。最も身近に存在する自己表現の手段として「自己を収めた  
封筒」とも、「自己の受け皿」とも形容された手紙は、人間の「個性」を指向する小説と目的を共

有する表現媒体であるからだ。世界初の小説『パミラ』が書簡体小説だったことはすでに言及したが、アメリカにおいても小説は書簡体小説として始まった。アメリカ最初の小説であるウイリアム・ヒル・ブラウンによる『親和力』（二七八九）を皮切りにして、一八世紀から一九世紀への世紀転換期に至るまで、初期アメリカ小説の担い手たちは、好んでみずからの小説を「手紙の束」として世に送り出した。イギリスとは植民地関係にあったアメリカだから、母国イギリスにおいて流行していたジャンルを継承する形で自国の文学を発達させたとしても、取り立てて不思議がる必要はないだろう。しかし、だからといってアメリカ文学における書簡体を、イギリス書簡体小説の二番煎じだと決めてかかってはならない。独立戦争後にアメリカ文学の担い手となった作家たちは、アメリカ的な文学表現の追求に極めて意識的に取り組んでいたのであり、アメリカ文学における書簡体にも彼らの探求精神が間違いなく宿っているからだ。

事実、『アメリカ農夫の手紙』を書簡体文学として読むことの最大の意義だと思われるのは、それが書簡体のアメリカ的な特徴について、我々の考察を深めることにつながってゆくことだ。イギリス文学における書簡体は、一八世紀を通して、私的表現との親和性をより一層強めてゆくと言われるのに対して、『手紙』は、アメリカの書簡体が、人間関係を仲介する手紙の機能性により依拠するようになって、個人の社会性を問題化する表現媒体へと成長する動きをみせることを例証してくれている。『手紙』は、厳密に言えば、書簡体小説ではなく書簡体ナラティブなので、『手紙』の書簡性を、そのままアメリカ書簡体小説の書簡性と同一視することはできない。しかし、アメリカ

書簡体小説には、確かに、パミラのような単独の手紙マニアに焦点を当てるよりは、むしろ手紙のやりとりのほうに重点を置く傾向がある。手紙の交換によって現出される小説世界を通して、読者は、共同体というものが決して抽象的な空間ではなく、手紙から聞こえてくる一人一人の声の効果である騒々しい空間であることを学び、取るに足らないとも思われる個人が、そのような空間の中で、いかなる行為者であり得るのかを観察することになるのだ。「個人とは社会の如何なる行為者であり得るのか？」このような問いを投げかける書簡体文学は、独立革命によって主権在民の社会秩序をいち早く樹立した独立国家であるアメリカにおいてこそ、最も相応しいものだったはずであり、そのような書簡体の語りの方法を示した点で『アメリカ農夫の手紙』は極めてアメリカ的な書簡体文学の原型であったといえるだろう。

※本稿における『アメリカ農夫の手紙』の引用は、すべて、『アメリカ古典文庫2 クレヴクール』（研究社、一九八二年）所収の『アメリカ農夫の手紙』秋山健、後藤昭次訳を使用した。同書の渡辺利雄氏による秀逸な解説「アメリカの夢と現実」も本稿を作成するにあたって大いに参考にさせて頂いたことをここで合わせてお断りしておく。

- Bauer, Ralph. *The Cultural Geography of Colonial American Literature: Empire, Travel, Modernity*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Branger, Jean F. "The Desire of Communication: Narrator and Narratee in Letters from an American Farmer." *Early American Literature* 12 (1977): 73-85.
- Cook, Elizabeth Heckendorn. *Epistolary Bodies: Gender, Genre in the Eighteenth-Century Republic of Letters*. Stanford: Stanford UP, 1996.
- Habermas, Jürgen. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. Trans. Thomas Burger. Cambridge, Mass.: MIT P, 1994.
- Hewitt, Elizabeth. *Correspondence and American Literature, 1770-1865*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Hollo, Christine. "Imagination, Commerce, and the Politics of Associationism in Crèvecoeur's *Letters from an American Farmer*." *Early American Literature* 32 (1997) : 20-65.
- Rutenburg, Nancy. *Democratic Personality: Popular Voice and the Trial of American Authorship*. Stanford: Stanford UP, 1998.
- クレヴクール『アメリカ農夫の手紙』秋山健 後藤昭次訳 『アメリカ古典文庫2 クレヴクール』研究社、一九八二年
- 時実早苗『手紙のアメリカ』南雲堂、二〇〇八年